

十八世紀ドイツの子どもの本(1)

ヨーハン・ゴットフリープ・シユンメル

『子どもの遊びと会話』

佐藤 茂樹

はじめに

これから六回にわたって、十八世紀のドイツの子どもの本を紹介いたします。十八世紀はドイツの児童書にとって画期的な時期です。ここで初めて、児童書を総体として議論するスタート・ラインが引かれました。言葉を変えれば、子どもの教育をその都度の

個別的な対応から市民階級というひとつの社会全体のプログラムとして考える動きが始まったということでもあります。

児童書の成立や普及には、社会構造の変化、とりわけ家族構成の変化が大きな役割を演じているのですが、その話は一通り代表的な書物を紹介してからのことにしましょう。最初に取り上げるのは、ヨ-

ハン・ゴットリーブ・シュンメル『子どもの遊びと会話』です。

著者シュンメル（一七四八—一八一三）は、子どもにはもともと遊戯への衝動が備わっていると考へ、それが子どもの知的成長に果す役割と積極的に向かい合おうと試みた教育者です。ヒルシュベルク近郊のザイテンフェルトという村に学校教師の息子として生まれ、神学を学んだ後、家庭教師を手始めに、修道院、騎士アカデミー、ギムナジウムなどに、教師を歴任しました。『子どもの遊びと会話』は、その間の経験と理念が具体的な書物に結晶したものであり、主として子ども同士が会話を交わす形で様々な遊びの範例を紹介して、一七七六年から七八年にかけて刊行され、好評を得ました。

ここで紹介される遊びは、何よりも集団で会話を通して行う遊びであることに特徴があります。他に交わる中でルールを理解し、出し抜き合い、補い合

い、最終的な目標に到達する遊びが中心を占めるのです。集団から隔離された個の完成ではなく、集団の中での個の成長と役割の自覚、すなわちへ社会化こそがこの書を含めたこの時代の多くの児童書に共通する目標であった、と先取りして述べておきましょう。

機知の果し合い

さて、この本に盛られた多くの範例から、ここでは「該当遊び」を取り上げることになります。今簡単に触れた特徴をこの例に典型的に見ることができからです。この遊びでは、親になった子どもが、まずこんなふうに取り出します。

ユーリウス 順繰りに、思いついたことを質問していくよ。で、答えられないものは、担保を出すんだ。

この遊びの第一段階は、担保を取り合うことです。担保を取るためには、相手の答えられない質問を考え出さなくてはなりません。一方、答は即答でなければなりません。知らないことでも、知らないと言ってしまうえば担保を取られてしまいますから、気転を利かせてその場を切り抜ける工夫も必要となります。

ユーリウス プロイセンの王様はどこにいるか？
ルイーゼ 服の中よ。

プロイセンの王様ですから、当たらず触らずの答えはベルリンのお城でしょう。しかしそれでは平凡すぎますし、ベルリンを離れていることも充分にあり得るわけですから、相手の反証も可能です。質問の次元をたくみにずらして、なおかつ反証できない

答えを返すところがみそなのです。あくまでも、遊びなのですから。また、時にははったりも効かせなければなりません。

レオポルト ブロック山の高さは？

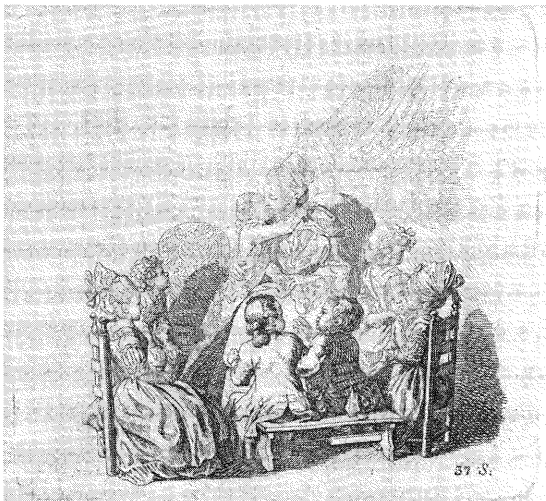
マールヒエン 六百エレと四分の一よ。信じないなら、自分で測ってみれば。

この答えは、もちろんでたらめです。しかし、「自分で測ってみれば」と言われては、もともと所在の不明な山の名前を出して引つ掛けようとしていた質問者は引き下がらざるを得ません。相手の腹を読んで、窮地をうまく切り返すことも必要だというわけです。私たちの文化の文脈では、黒を白と叫ぶくるめるような弁論を教え込むことに眉をひそめる方も多いと思われます。しかし、ヨーロッパに暮らすとこのような対応は日常茶飯事に体験します。言

葉がすべてであり、言葉を制するものがすべてを制するという原則には揺るぎないものがあり、その場でやり込められた方が負けなのです。

こんなふうになんかそれを聞いて、また質問された方も氣転を利かせて切り返しなから、担保を取り合うところまでがこの遊びの第一段階です。次には、その差引勘定がマイナスのものが担保を請け戻す工夫を凝らします。きつとそれぞれの大事なものを取られたことでしょう。請け出すためには、その価値に見合ったことをして、債権者ばかりかその場の一同を納得させなければなりません。一方では相手が答えられない問いを考え出すこと、他方では答えられなかったことへの負債を取り戻すために自分の能力の一端を実践すること、この二様の知的喜びを経験しながら子どもの知育が図られるところにこの遊びに託された教育的目的があると言えます。

ある女の子は、へぼらばなしを披露します。グ
リム兄弟のメルヘンで似た話をご存知の方もあるか
もしれません。主人公が道々桁外れの男たちと出会
い、仲間にながら遍歴し、一花咲かせるとい
う話です。七〇マイルほど離れたシュトラースブルク



の大聖堂からすずめを打ち落としたり、森の木をひと束ねにして引っこ抜いたり、ひと息で三十六基の風車を回したり、といった荒唐無稽な痛快さが読者を引き込みます。

実は、いわば教育の指南書にこのようなナンセンスな話を仕込んだ点に、時代の敷居を跨ぎかけている著者の新しさを認めることができるように思われるのです。

ユーリウス 担保を請け戻すのに、何をしてくれる。

ルイーゼ これこそという、けたはずれで、鼻をつまみたくなるようなほらばなしを聞かせるわ。両手でつかめるくらいけたはずれなやつよ。

ユーリウス ポシエットの中に入れてあるんだらうね。それじゃ、イヤリングを返すよ。

ルイーゼ ことわっておくけど、昨日の晩この話を聞いたばかりなの。うちのばあやが話してくれたからよ。おおげさで、品のないうその話。

弟がね、これがまたたいそう熱心に耳を傾けて、何から何まですっかり信じてしまったの。ブレーメンにあるときひとりの男がありました。それは……えーと、なんていったつけ、世界を股に掛けて歩くあの、剣と拳を頼りに……

十八世紀の市民社会の基本的な考え方では、理性に照らして矛盾するものは退けなければなりません。目に見えるもの、手で触れられるものをきちんと把握する。すると理に合うものと合わないものと識別され、現状がきちんと見えてくる。その結果、どこをどう改めればよいのかという具体的な方法や手順が明らかになる。こうして人間は現状の矛盾を

変革しながら着実に進歩へと向かう。このような考
え方が市民社会のバックボーンをなしていたのです
から、あり得ないことを面白がるのなどは許しがた
いこととなります。今日の私たちの感覚でまさに子
どもの領分だと思ふような空想や不思議も、厳しく
排斥の対象となっていました。メルヘンなどその最
たるもので、子どもが乳母に夜毎メルヘンを聞かさ
れることですっかり現実的な考えを損なわれてし
まった、という記述は当時のいろいろな書物に散見
されます。〈乳母の部屋〉という言葉は、迷信の温
床と同義だったので。

引用の箇所を理解するには、この点を踏まえてお
く必要があります。つまり、ここで担保の請け出し
のために語られる〈ほらばなし〉は、迷信の温床で
ある〈民衆の世界〉が長い年月にわたって蓄積して
きたものに属し、本来市民社会の後継者たる子ども
にはふさわしくないと考えられていたわけです。著

者は当時の良識の禁を犯してあえて封印すべきへ民
衆の世界を開けてみせたわけですが、ここでそれ
はなぜかという疑問に突き当たることになります。

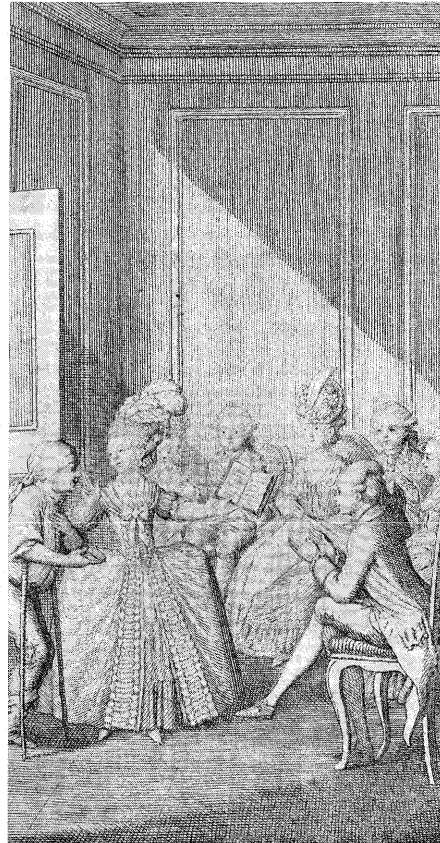
檻の中の野獣は恐くない

長い年月の中で語り継がれ、生き残ってきたもの
には、エネルギーがあります。それはこしらえ物の
教訓話よりもはるかに直接的に子どもの心を捕ら
え、虜にしてしまう力を持っています。著者は、そ
うした話の面白さと力に着目しながら、一方で、時
代の敷居のあちら側に半分身を置いている立場とし
ては、子どもにそれを手放しで委ねることはまだ
恐れがあつた。そこで「危険なもの」を飼い馴らす
術を教えながら、飼い馴らすことでひとつ上の次元
で知的に楽しめるものに変えてしまおう、と考えた
のではないのでしょうか。

では、飼い馴らす工夫を見ていきましょう。まず

引用した箇所では、語り手の少女はずいぶんと高をくくった口ぶりで前口上を述べています。「おおげさ」とか「品のない」とかひとまずくさした上に、弟がすっかり信じ込んでしまったという知的優越感をほめかす口ぶりもしています。「ばあや」から聞いた

という言葉は、まともに相手にするに足りないというシグナルに他なりません。こうしてみると、少女のスタンスはほらを信じ込ませて楽しむ語り手の立場とは初めから逆であることが読み取れます。さらに著者はこの話をストレートに進行させてはいません。「それは……えーと、なんていったっけ」とかという具合に適切な言葉をみんなでさがし合ったたり



(相互学習へのうながしでしょう)、茶々が入ったりして(アレクサンダー だめだよ、そんな程度じゃあ笑えないよ。/ルイーゼ まあ、お待ちを)。子どもに注解を加えたり、語られる物語は途切れのない直線的な進行を再三中断されてしまいます。これは、話にのめり込むわけにはいきません。事実、

グリム兄弟以前のドイツのメルヘンの痕跡を探していたある研究者はこの介入を残念がり、これさえなかったら本当に民衆的な語りの遺産が生き生きと再現されたのにと惜しがっているくらいです。

しかし、ここにこそ著者の意図があるわけで、のめり込むのではなく、突き放して物事を判断する工夫を施しているのです。そのためには、覚めた目を持てる距離が必要となります。〈異化効果〉の名で呼ばれる、二十世紀の劇作家の有名な手法を思わせはしないでしょうか。ほらばなしは子どもたちの会話の作る〈柵〉に囲まれており、読者は常に〈柵〉が作る視点を通して少女の語る話に接することになります。通して聞けば虜になりかねない「危険な話」も、こうしていわば距離を作られると、批判的に関与することが可能になるわけです。

子どもたちの会話を作る〈柵〉を理性の作る柵、少女の語る荒唐無稽な話を野獣と言い換えてみま

しょう。読者は、あらかじめ柵の中に封じ込められた野獣を見ているわけです。同じ土俵の上では危険極まりない野獣も、柵の中に封じ込めさえすれば、観察の対象となります。柵の外にいるものは、安全な距離を確保することによって対象を客観化し、あれこれと論評するゆとりを手に入れます。この距離を作り出すことで、〈民衆の世界〉が語り継いできた諸刃のエネルギーを宿す荒唐無稽な話も、茶化しながら楽しめる〈教材〉に変わるといふわけなのです。

袈裟の下から鎧が見えはしても

十八世紀の文学理論のモットーのひとつは、〈楽しみと教化〉です。この時代を代表するある作家によれば、〈楽しみ〉の部分は、飲みにくい薬を飲みやすくするシロップのようなものだといいことにあります。私たちが見てきたシユンメルの本も、子ども

も本来の好奇心を逸らさない工夫の下にも教訓すな
わち大人の配慮を上意下達するという、言ってみれば、袈裟の下から鎧が覗いて見える観は否めません。この点を後世の立場から批判することは容易い
ことでしよう。しかし、その批判は、子どもの教育
が階級の後継者を養成するという広範な目的の下で
考えられ始めたという新たな局面の評価と不可分に
なされなければなりません。

ところで、これまで説明の便宜上、読者を子ども
と同一視する語り方をしてきました。また、この本
の前書きは、確かに「子どもたち」に宛てられては
います。しかし、究極的な対象が子どもであること
に間違いのないとしても、最初に直接子どもがこの書
を手にしたのかどうかについては疑問があります。
ある研究によると、この時代の児童書はまずは大人
が読むものだったということです。そして読んだも
のを忠実に子どもに再現させるのではなく、大人と

子どもが一緒になって自分たちの着想を加えながら
その場その場で自由に変奏していく、というもの
だったということです。こうしてみると、この時代
の児童書は密室の個人的な楽しみとはほど遠く、コ
ミュニケーションを仲介する役割を担っていたと見
ることができます。『子どもの遊びと会話』に盛り
れた様々な範例も、そうした使われ方の中で、固定
化した内容を上意下達するにとどまらず、創意工夫
による楽しみと教化の融合をその場に合った形で生
かしながら、著者のもともとの構想を越えて一人歩
きを始めたかも知れません。

書物が予定の知識の入れ物に止まらず、有機的に
次の書物の構想を胎動させていく。そのダイナミズ
ムを感じさせるとしたら、こうした二百年前の書物
もけっして用済みとはならないでしょう。

(関東学院大学)